

かつて軍国少年で育った私ですが、近ごろつくづく思うのは、武力で得たものは武力の消滅と共に失うということです。満州も朝鮮も台湾も。あれから六十余年、平和な暮らしが続いています。これから、いつまでも平和に暮らしたいと思います。

人生観を変えた引揚げ体験

東京都 南風洋子

はじめに

一年三カ月の異常な体験が、いまだにかさぶたのようになつて体中にこびりついている。私の体のどこかで「どうせ人間なんて！」とささやき続け、私の心を虚ろにしている。それほど、私にとっては強烈な体験であった。

一 終戦の三カ月前に渡満

昭和二十（一九四五）年の五月二十日、梅雨入り前の爽やかな気候の神戸駅から、私の一家は満州の新京（長春）に向かった。当時、父四十四歳、母三十九歳、そして私は十五歳であった。渡満の理由は、父の勤務する日本エヤーブレーキ株式会社、軍需生産の増強のために政府の指示によって、満鉄の傍系会社として満州制動機株式会社を立ち上げて、その工場長を父が命ぜられたことに

よる。

神戸の市街は、その年の三月の市街地一帯に対する焼夷弾攻撃によって、ほとんど焼き尽くされたが、五月十一日の神戸市とその周辺の軍需工場を目標とした、爆弾による空襲によって破壊され尽くして、市内はそれこそ一望千里の焼野原となっていた。

我が家は、幸いにもかろうじて焼け残った。疎開してあった家財道具を取り寄せて、荷造りをした。

この危険極まりないときに、国家の命令によって満州に行くのだから、家財道具は軍艦で運んでもらえた。だから荷物は間違わず必ず新京の家に届く、そして満州には日本軍最強の精鋭関東軍が、厳然として存在しているのだから、満州の地に届きさえすれば絶対に大丈夫だ。内地にいるより、どれだけ安心だか知れない。食糧も豊富だし、何一つ不自由なことはない。近い将来には、内地の人々は先を競って満州に疎開するだろうなどと、

周囲の人々は羨ましさを含んで口々に言っていたし、父や母も何の疑いもなくそう信じ込んでいた。母などは、娘は満州で結婚させることになるだろうと考えていた。そのために、親類や知人たちに頼んで懸命に衣料を集めて、私の嫁入仕度の着物などを作っていた。喪服までも揃えていた。

私は私で、毎夜毎夜の空襲警報に脅えることもなく、友だちの中で私一人が死の危険から解放され、安穏な日常生活を過ごすことができるのだという解放感・安ど感に浸りながらも、多少の後ろめたさを感じていた。

様々な思いを込めながら、神戸駅から汽車で下関駅に降りた。関釜連絡船で行くのが一番安全だろうというので、下関港の栈橋を渡った。私も、自分の身の回りのものなどを詰め込んだリュックサックを背負い連絡船に向かったが、やはり栈橋の上では足が震えていたことが、今でも忘れられない思い出である。

これが最後になるかもしれないと言われた連絡

船にどうにか乗り込むと、早速に戦闘服姿の船員さんから救命胴衣を着けさせられた。やはりショックだった。何かしら死がすぐそこにきているような気持ちになり、電流のような衝撃が背中を走り抜けた。父母とちよつとでも離れないように、くつついていた。

機雷だらけだといわれる玄界灘を、明かりを全部消した真つ黒な船は、真つ黒な海を静かに進んでいたが、エンジンの音と大波が船底にぶつかると不気味な響きで気が高ぶって、体を横にしているも緊張していて強張っていた。息を詰め、まんじりもしない一夜が明けて、ほっとした。

やつとの思いで釜山港に無事に着いた。埠頭では、朝鮮人が海苔やスルメを売りに寄って来た。内地ではもう珍しい物になっていた海苔やスルメが、ここでは無造作に扱われていて、外地に来たことをしみじみと体得した。

釜山からは汽車に乗ったが、鉄道線路は、内地と異なりレール幅が広く、客車内もその分ゆった

りしていて素敵だった。これが南満州鉄道といわれ、いつか学校で習ったアジア号の走る線路だと初めて知り、満州に来たのだという実感を味わった。快適な汽車の旅で、だんだんと北に進んで行った。

北に進むにつれて、沿線の電灯も明るく輝いていて、やつと安ど感が沸いてきて、命が助かった実感があった。

安心して、つい疲れが出てうとうととしているうちに本格的に眠ってしまい、期待していた鴨緑江をいつ渡ったのかも知らなかった。

列車は、滑るようにして新京駅のプラットホームに着いた。赤レンガ造りの大きな駅舎、そして広々とした駅前広場、見慣れていた神戸駅とは比較にならないくらい立派な駅に、びっくりした。市街は大きな緑の街路樹に囲まれていた。新京は一年のうちで一番美しい季節であった。見るもの、聞くものすべてが珍しく、しばし新京の風景に酔いしれていた。

市街を走る路面電車は、ブルーの電灯をつけていた。路幅は広く、アカシアの白い羽のような花が街一面に舞っていた。

会社の日本人社宅は、レンガ造りの立派なものであった。神戸にはレンガ造りの洋館がたくさんあって、私はそこに住む人を羨ましく思ったことがあったが、今自分がそのような生活ができることが、夢のように思えた。

社宅に落ち着いた私は、まず第一に空襲の無いことが、何にも増して嬉しかった。新聞・ラジオなどからは、毎日内地の空襲の様子が伝わってくるが、そのたびに神戸で別れた友達のことが思い出されて、心が休まることがなかった。

私は、希望したとおりに市内の錦ヶ丘高等女学校に転入が許された。生徒はほとんどが日本人だったが、中に何人かの満人がいた。後で知ったが、満州国政府の偉い人の娘とか、経済界のトップの娘とかだったそうだ。

下校時の道々で振り返ると、はるかかなたの地

平線に真紅の夕日が沈んでいくのが見られた。あの赤い赤い夕日の沈む様子は、今でも私の脳裏に焼き付いている。満州を象徴する風物詩の代表的なものであろう。

新京での生活が始まって幾日かが経ったある日、学校から帰ったばかりの私を待っていたように、青い顔をした母が私に声を弾ませて言った。「洋子！うちの荷物が、ほとんど沈んだらしい」と。私もこれにはびっくりした。軍艦に乗せて安全第一で運んでもらえると、神戸で荷造りをしていたときにみんなが話していたし、私もそう信じていたので、全部沈むなどということは考えてもみなかったことである。家財道具類は、多少時間はかかっても、異常なく届くとばかり思っていたのに、裏切られた気持ちになり、しばらく呆然としてしまった。伝えられた話によると、我が家の荷物を積んだ船は、下関港を出たとたんに、機雷に触れてそのまま沈没したとのことであった。

それからは、母と私とで当座に必要な生活必需

品を買い集めに、新京の繁華街にあるデパートなどにしばしば出掛けた。そのころでも品物は豊富で、お金さえ出せば何でもあった。毛皮のコートでも、でっかいかりんとうのような揚菓子でも、神戸では並んで買っていた巻煙草も、いつでも簡単に買うことができた。生活に最低限必要な品物もすぐに揃って、普通の日常生活は何不自由なく過ごしていた。

父は、工場の建設に日夜忙しく働いていて、顔を合わせる事がなかなかなかった。戦局はだんだんと厳しくなり、沖繩もアメリカの手に陥ち、いよいよ本土決戦が叫ばれてきたが、まだまだ新京は掛け声だけで、一般市民の生活はあまり変化がなかった。

神戸の友だちはどうしているだろうかと思っていたが、そのころになると手紙もなかなか簡単ではなく、文通はだんだんと遠のいてきた。

七月になると、学校にもとうとう学徒動員令がかかり、組ごとに満鉄の木工場や日赤病院に通う

ようになった。

ある日のこと、街に買物に母と出掛けたが、そのときに乗ったマーチョの御者の満人が、「今に、あなた方が我々を乗せて引くようになるのだ！」と、意味ありげな言葉をつぶやいていた。母は私と顔を見合わせて黙ってマーチョを降りたが、何となく気味の悪いことだった。

二 無蓋貨車で朝鮮へ

八月の満州は暑さが厳しいが、朝夕は急に温度が下がるので、体調を整えるのに苦労した。しかし、神戸と比べるとしのぎよかった。神戸のように、あのじめじめした湿度がないだけでも楽だった。私は、動員先の日赤陸軍病院までの道を、隊伍を組んで汗をかきかき軍歌を歌って行進した。動員先への通勤は、どこでもこのようにして通っていた。

黒い子豚が道端でよたよた群れを作って、私たち動員学徒の一団をやり過ごしていたが、よその人が見たら、私たちもこの子豚集団と同じように

よたよた歩きではなかったかと思う。今思い出し
ては一人ではほ笑むことがある。

九日になって突然に空襲警報が鳴ったが、まさ
に青天の霹靂（へきれき）のことで驚いたが、空襲そのものに
はさんざん内地で経験してきた私たち家族は驚く
こともなく、待避もしなかった。今までも、隣保
（隣組のこと）の防火訓練にも出たことがなかつ
たので、そんな私たちに対して地元の人たちは、
「非国民だ！」と言って陰で怒っていたようだ。

八月十一日だったと思うが、父は夜中に関東軍
司令部から呼び出しを受けて、急いで出掛けて行
った。何ごとかと思ひ、母と二人でまんじりとも
できなかった。

しばらくして戻って来た父の口から、意外なこ
とが伝えられた。「女、子供は全員、一時南の方
に移動させるように命令された」ということだつ
た。「寝耳に水」という言葉があるが、その言葉
どおりだった。親子三人が、初めて離ればなれに
なることだった。私も覚悟をしたが、それは気持

ちの上だけのことで、体は全然反応していなかつ
た。具体的にどうすれば良いのか、父・母とはど
うなるのか？ 時間が経つにつれてだんだんと不
安が増してきて、体は動き出さなかった。

ようやく気持ちが少し落ち着いてきたときに、
ふと数日前からのことを思い出した。我が家の近
所にある関東軍の官舎の人たちが、リュックサツ
クを背中に背負い手に荷物を持って、小さい子供
の手を引きながら、人目を忍ぶようにしてどこか
に消えて行った。昨日も一昨日もそのような光景
を見ていたし、毎日毎日そのような格好をして黙
りこくった姿を幾組も目にして、内心では不思議
に思っていたが、そんなに大変なこととは思ひも
しなかった。母にも黙っていたが、父の言葉か
らふと考えると、あれは軍人の家族が、私たちよ
りひと足先にどこかに移動したのだと思ひ当たつ
たものだった。

父は再び呼び出しを受けて、関東軍司令部に向
かった。ほどなくして戻った父は、会社の幹部と

話し合つて、避難する社員、家族の責任者を命ぜられたとのことだった。私たち家族は、親子ばらばらにならずに一緒に行動できることが一番嬉しく、ほっと安心したものだつた。

母と一緒に買って買集めた家財道具ともわずか数カ月でお別れとなつた。それだけに、あまり思い残すことはなかつた。私たち家族は、再びリュックサックに当座の物を詰め込んで、新京駅前の広場に集合した。つい数カ月前に長旅を終えて新京駅に降り立ち、一年で一番に美しい新京の姿に印象を深めたばかりにと思うと、感慨無量なるものがあつた。あのときは希望と期待に満ちていたが、今度は不安と落胆が渦巻くもので、それこそ月とすつぽんのごとき感情の違いであつた。

新京駅前広場は、既に人間であふれていた。みんな思い思いの姿をしていたが、だれの顔にも笑顔は見られなかつた。次々と列車が到着して避難者に乗せていて、また次々と南に向かって駅を出て行つた。

夕方近くになつて、やっと私たちの順番がきて列車に乗り込んだが、その列車は石炭を積む貨車で無蓋であつた。皆黙りこくつて座つていた。朝早くから新京駅前に並び、やっと乗れた貨車。私たち家族を含めて、みんなは疲労困ぱいの状態で座るとすぐにそのままの姿で居眠りを始めた。私も緊張感が自然にゆるんでしまい、知らない間に眠つていて、列車が新京駅を離れたことは全然知らなかつた。目が覚めたときには、すっかり夜になつて周囲は真っ暗となつていた。

列車は、止まつてはゆっくり動き出し、動いてはすぐに止まつての繰り返しで、どこを走つていくのか皆目分からなかつた。ただ新京駅にいたときには、満天の星空がきらきらと輝いていて美しくあつたが、その星もいつの間にか見えなくなり、漆黒の闇夜であつた。この列車は、私たちがどこに連れて行くかとしていくのか分からず、全く列車任せの避難行となつた。どこまで行けば安全なのかは分からないが、このまま南へ南へと下れば、

そのうちにあのすさまじい連日連夜の空襲に脅えている内地に行ってしまうのではないだろうか、と思ったりした。暗闇の中から、だれかの声で「鴨緑江を渡った！ もう日本だから大丈夫だ。安心しろ！」と言っているのが伝わってきた。しかし、何がどう大丈夫なのか、それはだれにも分からなかった。かえって不安な気持ちをかき立てるばかりであった。

そのうちに、漆黒の空から雨滴が落ちてきた。皆は、ただ黙ってその雨滴を顔にしたたせながら、乗り続けていた。

「ガタン！」と、ひときわ大きな音を立て横揺れをして列車が止まった。「ここからは先に動けませんから、全員降りて下さい！」と叫ぶ列車乗務員の声が、暗闇の中から聞こえた。どうしてなのか理由は言わないので、私たちもすぐには動かずにじっとしていた。

後で知ったが、それは八月十五日の夜中の一時ごろのことだった。そのうちに、地元の朝鮮人の

人たちが、ローソクを灯して迎えに来てくれたので、私たちはやっと腰をあげて車外に出た。雨はもう止んでいた。

案内された所は、北朝鮮の博川小学校の教室だった。(これも後で知ったことだが) 予め準備されていたようで、すぐに炊出しの大豆の入ったおにぎりが配られた。事情がよく分からないまま、とにかくも屋根の下でひと安心した。背中に食い込んでいたリュックサックを降ろし、思い思いに横になれる場所を探して休んだ。今日一日のことを思い出しているうちに、知らず知らずのうちに眠ってしまった。

周囲の明るさに目が覚めた。青く澄み渡った北朝鮮の空に、太陽がきらきらと輝いていた。朝鮮独特の屋根の低い民家の軒先には、玉蜀黍がぶら下がっていたし、これまた朝鮮特有のはげ山が目の前にあった。

大きな河があるというので、何人かの大人の人たちについて、子供たちは泳ぎに出掛けた。子ども

もたちは、環境の激変にも負けずに元気だった。

私は、小学校の校庭に戻って水飲み場で洗い物をしてしていると、隣の奥さんが近寄って来て「洋子ちゃん！ 戦争が終わったらしいのよ？」と言った。「勝ったの？ 負けたの？」と私は聞いた。

奥さんは「負けたりしないよ！」とさり気無い返事をした。私は母の所に飛んで行ったが、父はもう呼び出されていなかった。もう、これで父を兵隊にとられることはない、あとは内地に帰るだけだと、それだけが頭の中を駆け巡っていた。

それから何時間ぐらい経っただろうか。突然に、「どんちゃん！ どんちゃん！」という音と共に校門から校庭に、そして校庭に輪を描いて、今まで目にしたこともなかった朝鮮の民族衣裳を着けた人々が、踊り狂って入って来た。白く長い髪をたらしした老人も、若い者と一緒になっていた。あつと思ふ間に、日の丸の旗は黒い卍と四隅に棒線が書き加えられて、朝鮮の旗になっていた。白昼に、夢まぼろしを見ているようだった。あまりの

激変に心も動揺してしまったのか、驚きも怖れも感じることもなく、ただ青い空に翻っている旗と白い髪の老人の顔を見上げながら、私は座り込んでいた。

その日だったのか、あるいは次の日だったのか定かでなくなつたが、私にはどうしても同じ日に二つのことを見たと思えるのだが、小高いはげ山の頂上に鎮座していた日本の神社が、青い空に紅連の炎を高く上げて焼け落ちた。この二つの事実が重なり合っていたことが、私の昭和二十年八月十五日、敗戦の日であった。

三 林の中で金日成の演説を

私たちが入れられていた小学校には、満州各地からの避難民団がたくさん集まっていたが、全部で千人はいたと思う。八月十五日の午後からは、炊出しの朝鮮の人たちはびたりと来なくなった。致し方なく、各集団が当番を出して炊出しをすることとなった。

団内では、収容された各教室ごとに班編成がな

されたが、母は私たちの教室の副班長になった。みんなは、集まれば内地の食べ物の話に花を咲かせていた。「竹葉」の鰻がうまかったとか、鮪のとの握りが食べたいとか、ユーハイムのケーキが夢に出てくるなどと、食べ物の話は罪を作らずだれもが話の輪に入れて、楽しいひとときであった。そのうちに食べ物の話が一段落すると、だれかが昔懐かしい流行歌を歌いだすと、みんなはそれに合わせて歌い大合唱となった。次から次へと歌は終わることなく続いた。こうして昼間は楽しく過ぎていったが、夜には恐い点呼があった。一晩のうちに、一度ならず二度も三度も、日本軍の軍服を着た朝鮮人の兵隊や青年団が回って来ては、報告をさせられた。

ある晩のこと、報告の仕方が悪いと言って班長と副班長が呼び集められた。戻って来た母の背中が、みみず腫れになっていた。尾錠のついたベルトで、背中を「百叩き」にされたとのことだ。母は、日本に帰ってからも長年、冬になると背中が

痛んで苦しんでいた。彼らは、女性も子供も見境がなかった。

またある日、私たち全員が林の中のような所に連れて行かれたことがあった。若い小太りの軍服姿の人が現れて、私たちの前に仁王立ちして話し始めた。あまりよく覚えていないが、確か「皆さんが悪いのではない。天皇陛下に責任があるのだ」というような意味のことを話して聞かされた。あれは金日成だと言う人がいたが、私には「金日成という人が、どのような人なのか、なぜ林の中のような所へ連れて行ったのか」何も分からなかった。周囲の大人の人たちも、大部分は何の反応もなかった。ただ言われるままに黙々と歩いて行き、黙って話を聞き、そしてまた黙々と帰って来ただけであった。

九月に入って、私たちは山の上の分校、といっても窓ガラス一枚無い、筵をぶら下げた廃校に移された。夜は電灯もつかず真暗の中で眠った。このころにはもう食糧がなかなかもらえなくて、ほ

んのわずかのさつまいもや大豆の煮たのが食事だった。皆は、リュックサックの中の衣類をこっそりお金に換えてきては、隠れてお餅を買ったりして食べつないでいたらしいが、父は団長の家族が勝手なことをすると示しがつかないと言って、一切母に何もさせなかった。私は栄養失調になり、毎日ゴロゴロ寝てばかりいた。体温も三十五度八分ぐらいしかなく、ある日、ものすごい鼻血を出した。母はたまりかねて、父に内証で自分の着物を売って、卵を買って私に食べさせた。父はもう何も言わなかった。

十月に入り寒くなってくると、このままでは全員凍死するというので、今度は近くの孟中里という町へ移されることになった。収容されたのは「江戸屋」という日本人居留民が経営していた旅館の跡だった。ここに移ってすぐに、今度は父が発疹チフスにかかった。博川小学校に収容されたときに懇意になった、村磯先生というお医者さんが飛んで来てくれた。新京の医大の教授だった人とい

うことだった。

父は、遠い山の上の掘った小屋に隔離されることとなり、母と二人で移された。それから二カ月ほどの間、私は父と母に会うことができなくなった。

ささやかな食糧を配給してもらうために、五人ほどいた男性は毎日使役に出た。食糧は一日一人米五勺。アルミの弁当箱を差し出すと、白菜二、三切と白い米粒が塩水の中で泳いでいた。いつ日本に帰れるか見当もつかなくなると、一時は明るかった皆も、だんだんと黙りこくりに、喧嘩も増えた。

着いたとき、お腹の大きかった二、三人の女性が、次々と赤ん坊を生んだ。母乳の出るはずもなく、赤ん坊は生まれたときが一番大きかった。だんだん泣き声も弱々しくなる赤ん坊のほっぺたをたたきながら、出ない乳房を必死になつてふくませていた母親の恐ろしいような顔が目につく。三日から十日ぐらいの間に、赤ん坊は皆死んだ。

茶色のお猿さんのような顔だった。小さなみかん箱に詰められて棒で担がれ、赤ん坊は朝鮮のはげ山の向こうへ消えて行った。皆は茶碗を割って送り出した。私自身、娘を生んで乳房をふくませてみて、あのときのお母さんのつらさが身に沁みだ。

四 嫁に来なければ食糧を絶つ

父が隔離されている間に、提出を求められた中から、何人かの女性が接待という名目で、朝鮮保安隊に呼び出されて行った。条件は、①二十七、八歳 ②既婚者 ③子供の無い人、ということであった。その人たちに何ごとか事件が起こったらしいが、それを口に出してはいけないことであった。そのうちに、その人たちのことを「犠牲者」という言葉でみんなの話の中に出るようになった。十二月になって、父と母がやっと山の上の掘っ建て小屋から戻って来た。髪はぼうぼうとして、体は骨と皮になっていた。しかし、父は助かったのだ。嬉しさに涙が止まらなかつた。母も大分疲労していたが、元気だった。二カ月ぶりに親子三

人が揃った。幸福というのは、このことを言うのだろう。何ともあれ、私は元気が湧いてきた。

北朝鮮の冬は、痛いように寒い。零下三十度になると、金属に触ると瞬間にくっついてしまう。鼻息はすぐに凍り、鼻の穴がくっついてしまう。井戸に垂らしたバケツの紐は凍てついて折れてしまい、井戸の淵は見る間に氷だらけになり、かろうじて真ん中にバケツの入るだけの穴が残る。白菜も凍ってしまう。

平壤からときたま訪れる連絡員に、一日でも早く日本に帰れるように陳情してもらうために、連絡員を接待するが、そのときだけは朝鮮の干鱈ひだらと凍りついた白菜を使って鍋物をして、なけなしの白米を炊いて食べさせた。石を積んだ炊き口に、地面に這いつくばりながら、裏山で取ってきた生木を突っ込んで火を点ける。それが私の仕事だった。炊きあがったご飯は、凍った所だけが白く炊きあがり、その他は茶色に炊きあがる。それでも、生唾を飲み込みながら給仕をした。

そのころになると、共同炊事を止めて、食糧は現物を各人に分配するようになっていた。少しでも口減らしをするために、身軽な女性は、朝鮮人の家に女中になって働きに出るようになった。ある保安隊長の家に、顔見知りの奥さんと一緒に、私は男の子の家庭教師として行くことになった。

この隊長は早稲田大学出身で、日本のどてらを着て長火鉢に座りたいなどという苦みばしった中年男で、奥さんは無く、暗い顔の母親と小学六年生くらいの男の子との三人暮らしで、没収した日本人居留民の金品を着服し、妾を七人持っているという良からぬうわさを持っている人物だった。私は男の子に数学を教え、部屋の便器（これは研きあげた銅の壺と、今から思えば朝鮮白磁だった）の始末をし、ときには井戸端で白い布を砧でたたき、霜やけの指を真っ赤にふくれあがらせていた。そしてある夜、隊長のあんまを命ぜられた私は、突然腕をつかまれた。叫び声をあげては危険だと思った私は、奇妙な笑声を発した。奥でアイロン

をかけていた同じ団の奥さんが飛んで来て、私を呼んでくれた。とっさに、私はすっ飛んでドアを開けた。すぐに逃げ帰って父に報告すると、父は黙って腕を組んだ。父は隊長から呼び出されて、

「もし嫁に出来ないならば、団に対する食糧の配給を全部差し止める」と申し渡された。私は「お父さんの命令に従います」と言い、母は「飢え死にするならば、二百何十人全員で死ねばいい。洋子を犠牲にするなら、私は洋子を抱えてこの前の線路に飛び込んで死ぬ」と言い張った。そのとき、博川から村磯先生が回診に來られ、早速肺結核という診断書を提出し、私は顔に泥を塗ったくって朝から晩まで寝ていた。それからしばらくして、この保安隊長は南朝鮮に夜逃げをし、私はやっと助かった。

五 犠牲者の人たちのお陰で！

こんな中で、マラリヤが流行し、私も母もかかった。四十度の熱が、ものすごい悪寒と共に一日おきにやってくる。ほとんど全員が交替に発熱。

ただ、一歩外に出れば一面の雪野原で、冷やすことには不自由せず、一日交替で看病した。そんなある夜、バリバリとトタン塀を乗り越える音がして、ソ連兵が数人入って来た。私たちは広間に固まり、若い人を中心に外側の輪を老人で囲んだ。

私たちの部屋は、四畳半に男四人女三人の七人がいたが、私と母ともう一人の奥さんだけは押入の布団のうしろに隠れていた。「ギャー」という声がしてロシア語が聞こえ、その夜は二百人近くの女性の一斉の叫び声に、兵隊は逃げて行った。

あとで聞くと、シベリアの囚人のトラック部隊が、孟中里にひと晩駐屯したのだという。

こんなことが二度ほど続いたある夜、例によってトタンを乗り越える音、一斉の叫び声、そして今度は天井裏の梁の上いち早く隠れて息を殺している私と母の下で、「マダム、ダバイ」という声、父の「ニエト」と繰り返す声、階段を駆け降りる音、トイレのドアの開閉の音、「助けて！」という悲鳴。一人、逃げ遅れてトイレにいたのだ。

すぐ下の階段まで引きずられて来て、父の名を呼び続けている。父はピストルを突き付けられたまままだ。そして、兵隊はまたトタンを乗り越えて帰って行った。私はうすうす感じてはいたが、このとき初めて「犠牲者」という意味を確認した。

常駐のソ連兵や朝鮮のオモニたちは、時々バラライカを掻き鳴らし酸っぱいパンを持って、あるときは青いリングを持ってやってくれた。ただ、通り魔のようなトラック部隊が問題だった。たまりかねた父は、トラック部隊をこの町に一泊させないように懇願に行った。そして、そのことと引き換えに重い荷物を背負って帰って来た。通過させる代わりに、隊長に女を提供することだった。

そしてその日がやってきた。父は、「犠牲者」の前に手をつけて頼んだ。そして、その人たちはそれからその日がくると、一人ずつ順番に出掛けて行った。今思えば、母がああとき叫んだように、そのご主人たちがもしいたなら、「皆が犠牲にな

ればいい！」と叫んだのではなからうか。その夜、部屋の襖を少し開けて、手をつけて「では行ってまいります」と言った人の顔を、私は忘れることができない。妻となり母となった今、一層、ずしりと重く私の胸の中に浮かぶ。あの人たちのお陰で、私は今こうしてここに生きている。

冬が過ぎて、春になっていた。まだ日本にいつ帰れるとも知れなかった。マラリアも続いていた。五月がきて、窓の外を歌を歌いながら朝鮮の人たちの長い行列が続いた。楽しそうなメーデーを、羨ましく眺めていた。

六 やつと脱出！　そして今もなお

また暑い夏が過ぎて九月に入ると、父は焦った。このまま冬を迎えると、今度こそ皆死んでしまう。頼み回って、やつとこっそり逃げ出すのを黙認してもらおう約束をとりつけると、二班に分けて出発することになった。三十八度線を歩いて越える組が先に出発した。私たちは後発の闇船で九月二十日、河を下った。それは塩の密輸船のようだった。

小さな船で、いけすのような所に私たちは詰め込まれた。その日も私はマラリアで発熱していた。順調にいけば、二日間で南朝鮮のどこかに上陸するはずだった。船には、二日分の水と食糧が積まれたいた。海へ出て二日目の夜だったか、今から思えば二百二十日の嵐なのだ。海は大時化おほしけになった。皆、胃液まで吐き出した。私はあまりの苦しさに、甲板のどこかに縛りつけてもらっていた。真夜中に帆柱が折れた。船は漂流していた。次の日は、本当にウソのような青天。船員が懸命に船を修理して、何とか走れるようになった。

七日目、やつと京城（ソウル）に近いどこかの河口に船は入る。塩水ではなくなるとたん、父の止めるのも聞かず、何人かが河に空缶をつるして水を汲み飲んだ。どこに上陸したのか、私は知らない。それから汽車に乗せられ、京城別院本願寺という大きなお寺に収容された。そこには、先着の日本人避難民が二千人くらいいたのではなからうか。もう食糧の心配もなかった。日本に帰れ

るのも目の前だった。その夜、突如私たちの団から下痢の病人が出た。コレラだった。アツという間に何人が死んだ。河の水を飲んだ人たちだった。

そして、十一月、仁川から「氷禄丸」という日本の船に乗った私たちは、初めて並木路子の「リングの唄」を聞いたのだった。佐世保の港を目の前に、一年半ぶりで私たちは甲板に並んで、敗れた祖国の山を見た。

こんな私たちは、もっとすさまじい引き揚げ体験者がたくさんおられる中で、苦勞も少なくまだまだ幸いのほうだったのかもしれない。そしてさらに、このたびの世界大戦で世界中の敗戦国民の味わったすさまじさに比べたならば、そしてまた日本軍や日本人が中国や朝鮮で行ったと言われる行為を考えると、これぐらいの労苦で内地に帰れたということは、むしろ感謝すべきことなのではなからうかと思うこともある。

ただ一つ、私はこのときから、私に接する人に対して、「この人は、あのときのような状況の中

に身を置いたら、どうなる人間なのだろうか」と考えるようになった。人間は、学歴のあるなしではない。あのような状況の中においては、むしろ慎ましい人々の方がちゃんと生き抜いていた。どんなに立派な言葉を聞かされても、実際の行為を見て信じられなくなった人もいた。純粹に人を信じるという心がなくなった私は、意地悪くすぐ人をひんむく癖がついてしまった。あまり良いことではないとは思っているが、あの十五歳時代の体験から得た人生観は根強く、なかなか抜け切れないことである。恐らく、私が俳優という仕事を選んだのも、このことが原因の一つではあるが、俳優にとって一番大切な感情の振幅が足りない気がしてならない。

あの一年半の体験が、私の感情のどこかに、あのやけどのあとのひつつれのように、またかさぶたのようにこびりつき、私のどこかで「どうせ！人間なんて」と囁き続けて、私を虚ろにしているに違いないのだ。私はそれが恐ろしい。何とか

してこのかさぶたをひっぺがして、どんなにささいなことにも、どんなにつまらないことにも、すぐに涙を流し、そして笑い、そして怒れる私になりたいたものだ。一つ一つの役を演じながら、私は恐らく一生それと戦い続けねばならないのだろう。戦争というものは、きつと勝っても負けても残酷なものなのだ。その残酷な戦争を、二度と起こすことのないように願うのみである。

みらい

神奈川県 内田 みさこ

一 生い立ち

この一文は、継母の虐めを逃れて新天地満州に渡り、夢破れ、動乱の中を生き抜いた、悲壮な半生録である。

「故郷は遠くにありて思うもの

そして悲しく唄うもの」

私は山口県厚狭町の山の中腹の小さな村で昭和四（一九二九）年三月に生まれ、子供時代はここで育った。昔は子だくさんの家が多かったが、私の村では子供の多い家は一軒だけ、井口という爺婆ちゃん夫妻と子供を入れて十人ぐらいの世帯であった。そんな子供の少ない所でも、放課後や休日にはだれかが集まって、隠れん坊や鬼ごっこをして遊んだ。

私が小学校に上がるとき、父はその子の性格と